研究最前線

THE FRONT LINE OF RESEARCH

政治経済学部

人類にとって負債とは何か

PROFILE

佐久間 寛
SAKUMA Yutaka

政治経済学部専任講師
専門：文化人類学、アフリカ研究

1976年　千葉県生まれ
1999年　明治大学商学部卒業
2014年　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
2019年から現職
博士（学術、東京外国語大学）

主な著書・論文
『ガーロコイレ：ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』（平凡社・2013年）
『ポランニー・コレクション　経済と自由：文明の転換』（共訳・筑摩書房・2015年）

所属学会
日本文化人類学会、日本アフリカ学会

近年考えているのは、「負債とは何か」という問題です。『大辞林』によると、負債とは「他から金品を借り受けて、返済の義務を負うこと」とあります。この定義によれば、負債は商品売買と同じ経済的な現象です。しかし、負債には経済に還元しえない性質があります。英語の"debt"、ドイツ語の"Schuld"、日本語の「借り」が金品の貸借のみならず「恩義」や「罪」を共示するとおり、負債は社会的存在としての人間の在り方と関わる複合的な現象です。

この分野をめぐる画期的成果が文化人類学者デヴィッド・グレーバーの『負債論』です。同書は、膨大な民族誌的資料を駆使して、負債が単なる経済現象ではなく社会的次元と関わることを論証し、金融資本の世界史的運動が私的利益の追求のみならず「負債は返さねばならない」というモラルに下支えされていることを解明しました。ただし、グレーバーの議論は、負債による不当な支配から人間をいかに解放するかという問題意識に貫かれており、負債をめぐって生起する現実の多元性が十分に検討されていません。金銭の貸借であれ、義務や負い目であれ、負債が人間を隷属化する契機となることは確かですが、一方で負債は社会結合や事業を新たに生みだす創造的契機ともなりえます。なにより、支配と連帯のうち、どちらの面が強く顕れるかは具体的な状況に依拠しており、抽象的な理論からは説明しきれません。そこで私は仲間とともに負債に関する人類学的研究を組織し*、世界各地のフィールドで以下4つの問いの検討に取り組んでいます。

デヴィット・グレーバー『負債論』

（1）何を負うか

人が借金などの経済的負債を負うのか、それとも恩などの社会的な負債を負うのかは、研究の最重要課題です。ただし現金で負うか恩で負うかは必ずしも区別できません。例えば、親分から子分に贈られる現金は、返済すべき経済的債務というより、受け手に負い目をつくりだす社会的債務となります。二つの負債の境界は流動的で、時に重複するのです。

ニジェール西部農村の結婚式における一幕

（2）誰（何）に負うか

これは負債の性質を左右する問題です。同じ借金であれ、債権者が両親か金融機関かによって負債の重みは一変します。親族、地縁、友人などの人間関係だけでなく、神、動物、自然といった非人間との関係も重大です。

（3）なぜ負うか

負債の理由はさまざまです。同じ農業の現場でも、多年生作物の栽培か一年生作物の栽培かによって、また前借される事物が現金か労働力かによって負債の性質は変化します。結婚や葬儀といったライフステージに付随した負債、新規事業や投資目的の負債、娯楽や賭博から生じる負債についても調査を進めています。

（4）いかに負うか

これは負債の制度化の度合いと関わる課題です。銀行の貸し付けといった公的制度を調査する場合には具体的運営の在り方を注視し、逆に制度化されていない場合には、そうしたインフォーマルな実践が生産・消費活動や儀礼・教育といった社会活動をいかに支えるかに着目します。返済方法も重要です。借り以上のお返しが必要な場合も、可能な範囲で返せば良い場合もあるからです。

かつて経済学は市場経済をめぐって「人間とは何か」という問いを検討し、「私的利益を追求する合理的個人」というホモ・エコノミクス像をつくりだしました。ですが、人は自己の利益のみならず、他者への負債（負い目）のために行為し、行為させられる社会的存在でもあります。負債とは何かと問うことは、ホモ・エコノミクスにかわる新たな人間像の探求につながるのです。

*科研費基盤B「負債の動態をめぐる比較民族誌的研究：アジア・アフリカ・オセアニア農村社会を中心に」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究」